

産学協力研究委員会「日本におけるケミカルバイオロジーの新展開第 189 委員会」
平成 28 年度 第 2 回定例会幹事会議事抄録

日時：平成 28 年 10 月 26 日（水）14：30-17：10

場所：津和野町公民館

島根県鹿足郡津和野町後田口 66 乙

出席者：【敬称略】

長田 裕之(理化学研究所) 穴澤 秀治(バイオインダストリー協会) 浅見 忠男(東京大学)

阿部 圭一(サントリーグローバルイノベーションセンター(株))

井本 正哉(慶應義塾大学) 上村 大輔(神奈川大学) 横田 博之(アステラス製薬(株))

町谷 幸三(日本農薬(株)) 平野 弘之(理化学研究所)

(学界委員 6 名 産業界委員 3 名)

オブザーバー【敬称略】

岡部 隆義(東京大学) 櫻井 香里(東京農工大学) 嶋田 泰宏(富士フイルム(株))

清水 力(クミアイ化学工業(株)) 菅原 二三男(東京理科大学)

藤本 ゆかり(慶應義塾大学) 水島 淳(日本たばこ産業(株))

宮本 秀俊(JSR ライフサイエンス(株)) 由井 慶((株)ファンケル)

議事内容：

1. 前回 平成 28 年度 第 1 回定例会 (平成 28 年 6 月 10 日)
幹事会・委員会 (平成 28 年 6 月 10 日)議事録確認 【資料 1】

2. 委員会活動

2-1) 特別講演について

長田委員長

「定例会の研究会では、特別講演の講師を選定しなければならない。

プログラム担当幹事をお願いしているが、浅見幹事にとりまとめをして頂くためプログラム委員長を担当してもらいたい。」

浅見幹事

「プログラム委員長の担当を承諾する。

各幹事・委員との連絡をとるためメールリストが必要である。」

上村幹事

「第 3 回定例会 特別講演 講師として筑波大学(国際統合睡眠医科学研究機構)

教授 長瀬 博先生を推薦する。 承諾されれば長瀬先生へコンタクトする。」

委員会にて確認。

特別講演の講師候補(事務局への提案)

- ・東京大学 医科学研究所ヒトゲノム解析センター 教授 宮野 悟 先生
- ・基礎生物学研究所(NIBB) 細胞間シグナル研究部門 教授 松林 嘉克先生

- ・奈良先端科学技術大学院大学 バイオサイエンス研究科
細胞間情報学研究室 教授 高山 誠司先生
- ・武田薬品 医薬研究本部化学研究所長 内川 治氏
- ・北里生命科学研究所 創薬科学部門
微生物応用化学研究室 教授 塩見 和朗先生
- ・北里大学 微生物制御工学研究室 教授 池田 治生先生
- ・北里大学北里生命科学研究所 教授・研究推進センター長
北里大学大学院感染制御科学府 教授 砂塚 敏明先生
- ・櫻井幹事(事前メール)より以下、提案があった。
ケミカルバイオロジー自体が学際的な領域であることを考え
組織をまたいで、他の研究機関との共同研究で研究テーマを進めた経験など
医療産業に対する行政の規制、支援策など

2-2) 特別事業について

平成 29 年度 (独)日本学術振興会産学協力国際シンポジウム 開催経費の一部負担

【資料 2】

(委員長)「委員会が申請したシンポジウムは不採択の旨 連絡(9月30日)
開催については数年先となるので、委員会予算と再検討して応募したい。」

2-3) 会員の増減について

山崎 裕章 委員(カルビー株式会社)より退任の連絡があった。【資料 2 - ②】

平成 28 年度の委員数は学界委員 21 名 産業界委員 20 名 計 41 名となった。

(委員長)委員会活動を活性化するため、委員の増強(産業界)を図りたい。

3) その他

梅毒の患者推移 (事務局) 【資料 3】

国立感染症研究所 東京都感染症情報センターによる「梅毒」の年別患者報告数の推移を紹介した。地域別では東京、大阪、神奈川、愛知、埼玉の順に患者が多い。
また男性患者が女性の 3 倍以上多いが 全国の女性感染者は 2010 年から 2015 年までの 5 年間で 5 倍と顕著な増加がみられている。

厚生労働省 健康局結核感染症課も「性感染症の予防啓発活動について」というリーフレットを作成するなど注意している。

特別講演の演題である秦佐八郎博士の化学療法剤(サルバルサン)開発に関連して現在の梅毒について説明。

質疑およびコメント

- ・現在の治療法は?

ペニシリンが効果的(耐性の発現もない)だが、国内では筋注製剤がない。
感染段階によって 4 週～8 週間の投薬

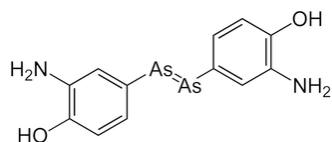
- ・患者の増加の要因は?

梅毒は現在の感染症という意識が薄く、予防について啓発が必要

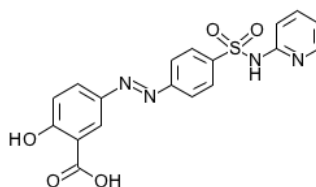
医師も実際に患者を診察した経験に乏しい。

・サルバルサンについて

サルバルサンはヒ素を含む化合物だが、窒素に置き換えサルファ剤の開発につながっている。

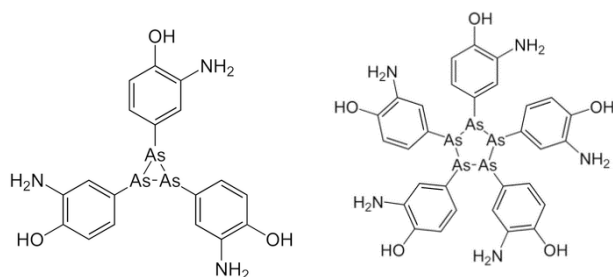


(A)



サラゾスルファピリジン

サルバルサンの構造は ヒ素-ヒ素の二重結合を含む図 A のような構造と考えられていた。ヒ素は二重結合を作りたため疑問が持たれ、図 B のような多量体構造が正しいとの説が発表された。生体内では酸化されて分解し、単量体として作用している。



(B)

Lloyd, N. C. et al. 2005.

"The Composition of Ehrlich's Salvarsan: Resolution of a Century-Old Debate".
Angew. Chem., Int. Ed. 44: 941-944.